

C-Link Creation

2010年度 社団法人守山青年会議所 長期活動指針

MORIYAMA JC VISION

～才モイをカタチに～

長期活動指針とは

長期活動指針の必要性

青年会議所運動の原点かつ理念は、「明るい豊かな社会の実現」です。その理念を達成するため、志を同じくする多くの会員が設立から今日まで活動しています。この青年会議所運動の「理念」は、どれだけ時代が変わろうとも不变です。

私たち社団法人守山青年会議所が、今後も青年会議所運動の理念の実現に向けて活動していく為には、節目節目に大きな目標（テーマ）が必要だと考えます。1990年（20周年）時には、長期指針策定の準備に数年前から取り組まれ「ヒューマンアメニティ守山」を長期活動指針として提言されました。また、2000年（30周年）時には、「ニューコミュニティーの共創」を提言されました。どちらにおいても、10年という期間を指針に基づき活動したことで、青年会議所運動の理念達成への目標になると共に、「道しるべ」としての大きな役割を果たしてきました。

本年、大きな節目である創立40周年を迎えるに当たり、過去の流れを調査研究し、社団法人守山青年会議所の今後10年を見据えた新たな長期活動指針を提言する必要があると考えます。この指針を今後の社団法人守山青年会議所の新たな「道しるべ」としながら、各年度が特色を持った運動展開をされることで、全メンバーひとり1人の心が一つになった活動が行えるはずです。

活動指針の種類

社団法人守山青年会議所では、期間の長短によって活動指針を以下のように区分しています。

- ◆短期活動指針・・・1年間（年間事業計画）
- ◆中期活動指針・・・5年間
 - ・長期活動指針を実行できるよう具体化し、活動目標をいかに達成するかを考え、「いつまでに」「何のために」「どのように」実行するかを明らかにし設定する。
 - ・長期に亘る計画中に予測も出来なかった環境や社会の変化によって長期活動指針を見直したり修正したりするときに用いる。
- ◆長期活動指針・・・10年間
 - ・5年・10年かけて追求する目標を設定し、どのようにクリアしていくかを計画する。
 - ・長期活動指針は、社団法人守山青年会議所のビジョンとして設定する事と、そのビジョンを実現するための課題を策定しなければならない。

戦　　術 ⇒ 短期計画（1年間）

戦　　略 ⇒ 中期計画（5年間）

ビジョン ⇒ 長期計画（10年間）

活動指針を作成するにあたって

指針の策定にあたり、下記のこととに注意しなければなりません。

- ・青年会議所の理念達成のため、社団法人守山青年会議所が活動する上での「道しるべ」であること。
- ・社団法人日本青年会議所の方向性も充分確認し、守山において活動するLOMとしての指針であること。
- ・今後10年間の時代変化を予測し、対応できるような指針とすること
- ・社団法人守山青年会議所が培ってきた過去の流れも充分に考慮すること。
- ・全メンバーの意見を取り入れられる機会をつくること。また、共有すること

過去の活動指針

15周年

「明るい豊かなまちづくり」5ヶ年計画の作成

20周年

「ヒューマンアメニティ守山」の作成
1987年 事前調査 「委員会がおもしろくなる本」
1988年 事前調査
1989年 事前調査
1990年 「ヒューマンアメニティ守山」の提言

30周年

「ニューコミュニティーの共創」の作成
1999年 事前調査・研究
「玉磨かざれば器をなさず」
2000年 参考資料「宝庫」作成
「ニューコミュニティーの共創」の提言

35周年

「Navigation 2010」の作成
2004年 参考資料「宝庫」作成
「Navigation 2010」の提言

40周年

2009年 「ニューコミュニティーの共創」の検証
全メンバー対象意識調査
長期活動指針（案）策定
2010年 新しい長期活動指針を発表

Prologue オモイをカタチにするために～真に提言できる団体を目指し～

はじめに

社 団法人守山青年会議所は、1971年創立以来、「奉仕」「修練」「友情」の三信条のもと、「明るい豊かな社会」の実現のために運動を続けてきました。それから39年が経過した現在、我々の理念は創立以来変わりませんが、我々を取り巻く環境は大きく変化してきました。高度経済成長の終焉とともに、既存の価値体系や常識が崩れ、物質的な豊かさは手に入れたものの、社会全体が目指すべき目標を失ってしまい混沌とした状態が長く続いているように感じます。近年では、地方分権の進展により、全国的に市町村合併が進み、道州制の導入に対する議論も活発になり、自治体という枠組みが大きく変わりつつあります。また、日本の総人口は少子高齢化の進行により2005年に初めて減少に転じ、その後も予測を上回る早さで進んでいます。一方では、社会は成熟し、人々の価値観やニーズは多種多様化し、「物質的な豊かさ」だけでなく「心の豊かさ」を求める傾向に変わってきています。このような中、我々は時代の変化に対応すべく、また時代を先取りすべく、柔軟に活動して参りました。創立40周年を迎える今、我々は改めて組織のあり方、地域のオピニオンリーダーとしての役割、これからの社会を背負って立つ青年経済人としての自覚など、まさに時代の先駆者としての資質が問われています。社団法人守山青年会議所が今後も明るい豊かな社会の実現に向けて活動し続けるため、ここに長期活動指針を提言いたします。



我 我がまち守山は、「住みやすさ日本一」が実感できるまちをテーマにまちづくりを進めています。守山の良さと問われれば、「自然の豊かさ」「保健・医療の充実」「交通の利便性」などが挙げられ、約87%の市民が住みやすいまちであるという認識を持っています。早くから中心市街地の活性化にも取り組み、「コミュニティ再生・強化」を基本姿勢としながら地域資源を活用し都市機能の充実に向けてハード面を整えると共に、民間のまちづくり会社により、ソフト面からも中心市街地活性化に取り組み、行政だけではない協働のまちづくりにも積極的に取り組んでいると言えるでしょう。ただ、一方では、雇用人口比率は、88%と県下最低であり、ベッドタウンとしての特徴を有しています。また人口は緩やかに増加していますが、一世帯当たり人員は減少し続けており、単身世帯や核家族世帯等、小規模世帯が著しく増加している現れもあり、学区によっては少子高齢化も進み、市民と地域との繋がりが希薄になってきている事が伺えます。

ま ちづくりは、常にそこに住む市民が主人公であるべきであり、市民ひとり1人がまちのあるべき姿を考え、そして想いを持って創り上げていくことが理想です。市民と地域の繋がりが希薄になり、市民がその想いを形にする術を失いつつある今、それを担うのは、我々社団法人守山青年会議所だと考えます。全ての市民ひとり1人が自立し、その想いを形に出来るようになった時、我々の理念でもある「明るい豊かな社会の実現」も形に出来るはずです。ただし、それを担うためには、本当の意味で市民そして行政に信頼され、提言できる団体でなくてはなりません。「このもりやまで必要な存在」となり、そこから生まれる貴重な経験や友情によって「自分たちにも必要な存在」になる。必要とされるJCとなり、市民ひとり1人がその想いを形に出来るまちを創造するために活動し、真に提言できる団体を目指そうではありませんか。



O

M O I ~ 才モイを ~

真に提言できる団体となるために

我々は、「明るい豊かな社会」の実現のため、「ひとづくり」「まちづくり」の双方からのアプローチによって活動をしてきました。ひとり1人が自立した市民となるために提言も行ってきましたが、その提言が受け入れられるためには、地域そして市民からも信頼される「このもりやまで必要な存在」である「真に提言できる団体」となる必要があると考えます。

K

A T A T I ~ カタチに ~

「才モイ」を「カタチ」にするためには

■ 4つのチカラ

「真に提言できる団体」となるという目標を達成するために必要な力を、「知識力」・「行動力」・「創造力」・「発言力」の4つと位置付け、それぞれの力を高めるための活動を行います。

今の社団法人守山青年会議所にその力がないわけではありません。今ある力をさらに高めることで「真に提言できる団体」となり得るのであります。

■ 3つのステップ

この長期活動指針では、目標達成までの課題を3つのステップにわけ、それぞれ期間を設けて取り組みます。

まず、ファーストステップでは、助走（アプローチ）として、5年の期間を設けます。提言できる団体として、そして必要とされるJCとなるために、各委員会の視点で土台となるべき組織を見つめ直しましょう。4つの力をより効果的にするために、その組織をさらに強固にしていきましょう。

次に、セカンドステップを、離陸（テイクオフ）とし、3年の期間を設けます。このステップでは、組織としての基盤を固めた我々が、4つの力に基づき、積極的にまちに対しての行動を起こしましょう。次のステップでどれだけ大きく上昇できるかは、どれだけ強く踏切ができるかで変わることでしょう。

最後にサードステップを、上昇（ライジング）とし、長期活動指針の集大成として2年の期間を設けます。市民そして行政に対する信頼を高め、「このもりやまで必要な存在」となり、真に提言できる団体となるために活動しましょう。

各ステップの最終年度には、成果を確認し、到達した部分、さらに推し進めなくてはならない部分、変更が必要な部分を明確にし、社会情勢や進歩状況を鑑みながら、変化に対応することも必要です。ステップを見直し、新たなプランが必要となる場合には、全メンバーがそれに参画できる環境を整えると共に、一丸となって取り組む必要があるでしょう。

MORIYAMA JC VISION 策定にあたり

この指針は「ニューコミュニティの共創」からの脱却ではなく、その実現に向けた10年間の取り組みを継承・進化させたものとして位置づけています。現在の我々にとって市民意識に彩られた新しい生活共同体としての地域社会とのまちは、もはやニューコミュニティではなく、コミュニティなのです。

そこで、本指針を「C - Link Creation」と名付けました。

我々の目指すまちを表す Community

市民を表す Citizen

行動を共にする仲間を表す Companion

まちとひとと仲間との有機的な繋がりで新しい未来を創るという想いを込めています。

4つのチカラ

チ

コウ

ソウ

ハツ

知

行

創

発

知

知識力

～「知識」によって、もりやまを知り、郷土愛を育もう～

我々は明るい豊かな社会を実現するために活動する団体です。その我々が、どれだけこの「もりやま」の事を知っているでしょうか。守山市の特性や課題、市が目指すまちの将来像、そして守山市民の意識。この「もりやま」でまちづくりをするためには、「もりやま」の強み、弱みを再確認し、強みを伸ばし、弱みを補う事が必要です。「もりやま」の課題や将来像を知らないくては、本当の意味でのまちづくりは出来ません。明るい豊かなまちづくりに携わる全てのメンバーがまちの事をもっと知るべきです。我々は、常日頃からまちに关心を持つ必要があるのです。

また我々は、個人でどれだけ「もりやま」のことを勉強しているのでしょうか。例会以外に研修の場がない現状では、個々のスキルアップは各個人に頼ってしまい、組織としてはいつまでたってもボトムアップが出来ません。青年会議所活動の根底には委員会活動がありますが、委員会活動はメンバー個々の学ぶべき場でもあるのです。あなたの学んだ事の全てがまちづくりに直結しています。委員会という場を大いに活用し、個々が「もりやま」を知る機会を増やしましょう。多種多様な個性あふれるメンバーが集まる青年会議所だからこそ、様々な情報や意見を得ることが出来ます。このような青年会議所の特性を活かし、各個人が持つ情報をもっと共有し、それらを知識として青年会議所活動に活かしていくことで、より良い活動につなげることが出来るでしょう。

行

行動力

～「行動」によって、もりやまを五感で感じよう～

JCにおける全ての活動は明るい豊かな社会の実現に繋がっています。ただ、我々は、一年365日のうち、どれだけ「もりやま」に出て活動しているのでしょうか。月に一度ぐらいは、朝でも昼でも夜でもいい、地域に出て地道に取り組める活動の場、そして突発的な事態に柔軟に対応できる仕組みを確立しなければなりません。JCはまちづくりの団体なのだと胸を張って言いませんか。我々が活動する場所はJCルームではありません「もりやま」というまちなのです。我々の活動をもっと市民に知っていただくためにも年間を通じてまちに出ることが必要です。「もりやま」を知ることは大変重要なことです、それを行動に移すことのほうが重要です。知識を得ても、行動に移さなければ知らないことと同じなのです。その知識を活かすためにも、我々はもっと「もりやま」に出て活動しましょう。また、社団法人守山青年会議所では、長年に亘り守山わんぱく隊事業を継続してきました。単年度制の青年会議所活動ではありますが、その特性を活かした継続できる事業が出来るはずです。長く継続する事でより多くの市民の方々に我々の活動を知っていただき、理解を深めていただきましょう。継続していくことにより、地域への効果が相乗的に現れ、運動としての拡がりを持ち、より良いまち「もりやま」を共につくる事に繋がります。



創造力

～「創造」によって、もりやまの未来を描こう～

我々はどれだけまちづくりに寄与できているのでしょうか。「明るい豊かな社会の創造」それこそが青年会議所の目的です。知識と行動を経て得られる創造力によって、「もりやま」の未来を描きましょう。我々がまちに対する創造力を高めるためには、個々のメンバーの資質向上と志を同じくする多くの仲間が必要不可欠です。我々は、まちづくりを行う団体に所属するメンバーである前にひとりの社会人です。ひとり1人の品格、行動、言動を認識し、常に地域の人々の視線があることを意識し行動することが必要です。一方で我々は、地域の青年経済人として、その義務を果たさなければなりません。このような時代だからこそ、気づきや学びを得るだけでなく、企業の社会的責任を自覚し、知行合一を実践し得る指導者の育成が必要であると考えます。地域経済に密着する我々が、明るい豊かな社会を築くべく活動を続けていくためには自分の会社の発展かつ安定が必要です。このような企業の成長が、新しい「もりやま」の創造にも必ず繋がるでしょう。また近年、NPO活動が盛んになり、守山市においても大小様々なまちづくりを行う団体が存在します。まちを良くしようという多くの団体と共に協力し合う事が今後も必要となってくるでしょう。お互いの長所を認め合いながら、まちの創造に向けて取り組もうではありませんか。

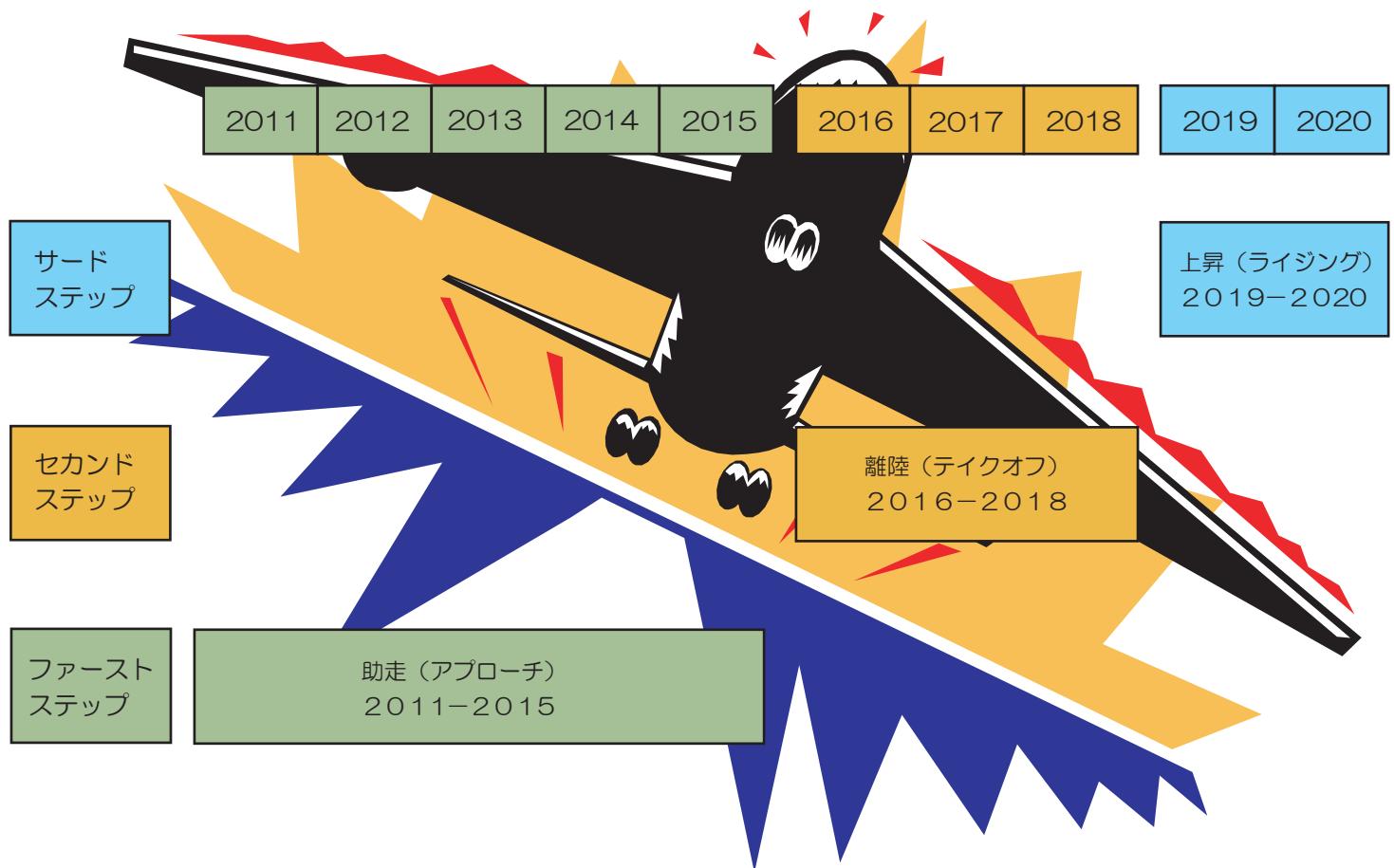


発言力

～「発言」によって、もりやまを創りあげよう～

JCはどれだけの市民に認知されているのでしょうか。行政にどれだけ信頼されているのでしょうか。提言できる団体として、もっと市民に認知され、発言する機会が必要ではないでしょうか。青年会議所として出席する会議は様々です。その中では社団法人守山青年会議所としてどのような考え方であるのかが問われます。我々は、誰がそのような問い合わせをされても同じ見解が示せないといけません。社団法人守山青年会議所として一つの見解が示せるような議論が必要です。また我々は、その活動の中でパネルディスカッション、マインドマッピングやプレゼンテーションなど、様々な考えを集約することや自らの考えを相手に伝える手法を学びます。我々はその学んだことをどれほど活かしているでしょうか。青年会議所活動を知らない方に対して、より簡単に、より分かりやすく我々の想いを伝える事は非常に難しいことです。学びを活かし、的確で効率的な発言を行いましょう。また発言と発信は切り離すことは出来ません。発信は、我々の考えを外部に伝える手段であり、青年会議所においては、その理念や活動を広く対内や対外に知っていただく事です。対内はもちろんですが、多くの市民に我々の活動を知っていただくためにも、もっと積極的に对外に発信する必要があるでしょう。従来の方法はもとより、より効果的に発信できる手段を常に模索し、多くの人の心に残る方法を確立し発信していきましょう。

3つのステップ



1. First Step ~ ファーストステップ ~

助走（アプローチ） 2011-2015

責任を伴った、必要とされるJCのための組織作り

真に提言できる団体を目指すにあたっては、「このもりやまで必要な存在」である必要があります。市民に認知され、必要とされるJCとなるために、我々は責任を持って行動しなければいけません。まちづくりを行う団体として、そして、公益社団法人を目指す団体として、メンバーひとり1人が責任を持って、土台となるべき組織を見つめ直しましょう。更にはこの「もりやま」を良くしたいと願う多くの情熱あるメンバーを増やし、まちの創造に寄与できる人材を拡大ていきましょう。それらを通じた貴重な経験や友情によって、JCが「自分たちにも必要な存在」になるのです。そのような活動によって、全メンバーが誇りを持って「私はJCです」と言えるような団体に変わっていくのです。次に続くテイクオフ、そしてより高いライジングに繋げるためにも、しっかりとしたアプローチは必要不可欠です。

各委員会が責任を持って、提言できる組織作りに取り組み、年度ごとに達成と反省を繰り返し、2015年には、より強固な組織となることを強く望みます。

2. Second Step ~セカンドステップ~

離陸（ティクオフ）2016-2018

強固な基礎に裏打ちされた力強く行動するJC

離陸（ティクオフ）では、3年の期間を設けます。組織としての基盤を固めた我々が、4つの力に基づき、積極的にまちに対しての行動を起こしましょう。次のステップでどれだけ大きく上昇できるかは、このステップで決まります。

「もりやま」の歴史や文化、特性や課題、市の目指す将来像。我々が目指す「明るい豊かな社会」の実現は、まずそのまちを知ることから始まります。例会や委員会、各個人でも学びそして共有できる機会を増やしましょう。更には、個々人の英知を集結し組織としての知識を高めるため、様々な事柄に対し積極的に議論の場を設け、社団法人守山青年会議所としてのコンセンサスを形成できる仕組みを確立しなければならないでしょう。

知ることと同等に大事なことは、このまちで行動を起こすことです。事業はもちろんですが、「もりやま」にて地道に取り組める場、そしてあらゆる事にフレキシブルに対応できる仕組みを確立しましょう。

3. Third Step ~サードステップ~

上昇（ライジング）2019-2020

真に提言できる団体へ、より強くそしてより高く

上昇（ライジング）では、2年の期間を設けます。2つのステップを経て、組織としての基盤を固め、積極的にまちに対しての行動を起こした我々が、市民そして行政に対する信頼を高めます。「このもりやまで必要な存在」となり、真に提言できる団体となるために活動しましょう。

「もりやま」について得た知識、それをどのようにまちづくりに繋げるのか。今までの学びを、まちを知ることから「もりやま」を創造することへシフトしなければなりません。実際のまちづくりに直結する知識の習得により提言へと繋げましょう。また、提言できる組織として、社団法人守山青年会議所としてのコンセンサスを得た「声」を発信する手段を模索しましょう。

そして、ただ提言するだけではない、「本当の意味で提言できる団体」として、その行動をもって市民そして行政に対する信頼を高め、「このもりやまで必要な存在」となるための行動を行いましょう。また、まちを良くしようという多くの団体と共に協力しまちを創造できるネットワークの拡充に取り組みましょう。まちづくりには、常に提言し続けるための創造力が必要です。社団法人守山青年会議所が提言できる団体としてイニシアチブを取り、わがまち「もりやま」の創造に取り組みましょう。

～組織進化のための見直しと精査～

【 総務 】

総務の役割は、事務、財政面において総合的に実務の執行をサポートします。組織の根幹を担う委員会であることから、年間予算、決算及び各委員会の事業内容、強いてはLOM内の全てを十分に把握することが求められます。現在、公益法人の取得に際し、青年会議所の存続に関わる問題が山積しています。これら諸問題は総務委員会が深く関わり、検討していく必要があります。より多くの知識と経験を結集し、より優れた新しい公益法人としての再出発に寄与しようではありませんか。また、会員数の減少に伴い、財政面での苦難は当面続くものと思われます。基本収支の改善と適正化への努力と共に会員数に応じた組織を検討する必要があるでしょう。



- 事務局運営のシステム化・マニュアル化
- デジタルアーカイブスの構築
- 事務局のオープンスペース化による有効活用

過去、100名以上であった会員数も現在は当時の約半数に減少し、会員個人への負担が増加しつつある状況です。個人に対する負担の増加は、組織への悪影響を及ぼしかねません。委員会編成の見直し、単独委員会の必要性、室単位での動きの必要性などを今一度見直し、現在の会員数に相応しい組織作りや組織運営が求められます。また、経験豊富な会員の卒業やメンバーの高年齢化などで、入会から5年未満の会員数が増え、経験の浅い会員が総務委員長や事務局長などの重要な役職を務めなければならないケースが増えてきます。今後、誰が総務部門の担当になってもスムーズに運営が引き継げるシステム作りや、独自の事務局運営マニュアルが必要でしょう。LOMの要となる総務の運営がスムーズに行われるシステムが必要です。

近年では、資料のデジタル化に伴い、電子資料の利用が積極的に行われています。理事会資料はインターネットで配信され、事前に確認をすることができるようになり、スムーズな理事会運営に繋がりました。しかし、現在の電子資料に関しては、その管理方法や保存方法に統一性が無く、ずさんであると言えます。今後は、総務主導で資料の管理方法を一元化する他、膨大な資料を誰もがいつでも簡単に見る事ができるシステムが必要でしょう。また、過去の紙資料などもデータ化し、社団法人守山青年会議所のデジタルアーカイブスの構築に向けた取り組みを行いましょう。

県下の青年会議所の事務局において、会員が自由に利用できる独立した事務局を持つのは守山を含めて数えるほどしか存在しません。大変恵まれた環境で活動できる我々ですが、近年の会員数の減少により、土地の借地料や光熱費等が財政面での負担となりつつあるのも現状です。日曜祝日の事務局の解放、平日利用の少ない2階会議室の貸出しや事務局での例会開催など、新たな利用方法も検討するべきではないでしょうか。

～才モイを伝えるメディア戦略～

【 広 報 】

近年、誰もが必要な時に必要な情報が収集でき、さらには誰もがインターネットを通じて情報を発信できる時代でもあります。あらゆる情報が氾濫する中、我々の情報を司るポジションとして広報の役割が非常に重要です。今後も私たちの顔として活用発展させていかなければならぬのはもちろんですが、様々なメディアを用いて情報を発信していく必要があります。それぞれのメディアの特性を活かし、効率的にリンクさせて、私たちの思い、運動を社会に訴え、私たちの活動をアピールしていきましょう。かつての情報発信のみのスタイルから、徐々に双方向受発信型に成長してきました。しかしながら、まだまだ活用しているとまでは言い切れません。我々の才モイをしっかりと伝えるためのメディア戦略を考えていく必要があるでしょう。



- ホームページの活用によるインタラクティブサービス
- 新たな広報スタイルの模索
- 外部広報機関との連携によるグローバルネットワークの構築

現代は誰もがインターネットを通じて情報発信できる時代です。公益法人化に伴い、決算資料の公開や例会や事業の情報公開など、ホームページの運用は今後益々重要になります。ホームページは統一したスタイルで中身の充実に力を注ぐべきであり、場合によってはプロによるサイト構築も視野に入れるべきではないでしょうか。今後も、ただ発信するだけではなく、双方向のネットワークづくりが必要となってきます。事業や例会の報告だけでなく、我々の学んだことや、守山市内の情報など、守山に興味を持った人のアクセスがあるようなコンテンツも重要となってくるでしょう。どのようなホームページに多くのアクセスがあるのかをしっかりと調査研究し、リアルタイムで情報の更新ができるホームページを有効活用し、市民との情報の共有化、他団体とのネットワークの構築に努めましょう。

現在、我々の運動や思いを伝える手法として、市民向け広報誌とホームページを活用しています。市民に向けて我々の運動や思いを発信する手段として長年発行されてきた広報誌「郷土」ですが、近年では新聞を取らない家庭も増えており、今後の発行形態や配布方法を検討しなければなりません。今まで培ってきた学校やPTAなどを通じての配布も視野に入れた取り組みが必要です。内容については、よりターゲットを絞り込み、我々の思いがしっかりと伝わるように心掛けた誌面作りが必要です。

今後の広報担当委員会は、渉外部門の活動を積極的に行い、外部機関との信頼関係を密にすることが必要です。外部メディアの活用法も検討し、より戦略的な広報活動を行いましょう。新たな情報媒体とのコラボレーションなども視野に入れ、より相手に伝わる情報発信が必要でしょう。渉外部門を担当する者は、社団法人守山青年会議所の看板を背負っているのだという自覚を常に持つ事が必要です。また渉外部門担当者だけでなく、全会員が社団法人守山青年会議所の宣伝部長となり、我々の運動や思いを常に発信することを心がけて活動しましょう。

～例会の充実と眞の交流を目指し～

【例会・交流】

バブルの崩壊以降、青年会議所においても会員相互の交流について見直されて、過去の慣行を払拭すべく、我々はより活発に、より情熱的に取り組んできました。現在、公益法人格の取得に際し、交流や懇親会について今一度見直す時期に来ています。家族・そして市民の理解を得られるような活動が必要となってきます。例会においては、今一度、例会の持つ本来の目的や意味を充分に理解し、全メンバーが自ら目的意識を持って参加できるように取り組む必要があるでしょう。また、交流においても改めてその意味や手法を見直し、本当の意味での交流で絆を深め、友情を育みましょう。



- 歴史と伝統を重んじる新たな例会スタイルの確立
- 委員会の垣根を越えた本音で話せる仲間作り
- 新たな英知を求めた他団体・他LOMとのコラボレート

我々は毎月、非常に高い出席率と厳肅さを併せ持った素晴らしい例会を開催しています。例会のみならず、各種大会においてもメンバーの参加意欲の高さには目を見張る物があり、それらは受け継がれていくべき良き伝統でしょう。ただ近年、例会本来の意味合いが薄れてきているのではないかという声が聞かれます。例会は、会員一同が集まる交流の場であると同時に自己を高める研修の場であり、その内容の充実によって参加意識を高める事が必要です。出席意識の高い今だからこそ出席率に重点を置くだけではなく、どれだけ多くのメンバーが学びや友情を得られるかを追求し、歴史と伝統を重んじる新たな例会スタイルを確立していく必要があるのではないかという声が聞かれます。「今までしてきたから同じようにする」ではありません。誰のため、何のためかを明確にし、より効果的な設営のために取捨選択が必要となってくるでしょう。

今後の例会においては、公益法人格取得によって懇親会のあり方や交流例会のあり方を見直さなくてはなりません。また、公開例会の更なる増加も視野に入れる必要があります。ただし、交流や懇親を全て否定する訳ではなく、むしろ交流によって絆を深め、友情を育む事も大変重要です。今後は、例会の場ではない場所での交流事業や家族を交えての事業を考える他、以前は活発であった同好会活動を取り入れるのも良いでしょう。委員会の垣根を越えた本音で話せる仲間作りが必要です。

他LOMとの関わりを考え、交流だけではないスケールメリットを活かした合同事業や合同例会などの取り組みも考えていきましょう。もちろん、守山を良くしようとする他の団体との交流は今後も活発に行うべきであり、違った視点からまちづくりを考える必要もあるでしょう。

～ 魅力ある会員の創造へ ～

【 会 員 研 修 】

近年、社団法人守山青年会議所の研修では、人間力開発を主軸に会員の資質向上を図ってきました。急激な社会情勢の変化の中、青年経済人として、もりやま市民としての資質向上、そして変革が求められているのが現状ではないでしょうか。

青年会議所活動によって地域を活性化させ、社会情勢に変化を与えるためにはより多くの新しい英知が必要であり、明確かつ充実した研修事業が必要です。今後、公益法人として、メンバーに対する研修のあり方を問われますが、青年会議所活動が地域社会の奉仕だけではなく、自己修練によっても成り立っていることを踏まえ、社会情勢にあつた研修を行うべきです。



- コンプライアンスとモラルを備えた魅力ある会員の創造
- コミュニティ デベロップメントへの特化
- アクティブに活動できる会員

我々は、青年会議所会員としての自覚、そして意識改革の研修によって、自らの活動に自信と誇りを持たなくてはなりません。メンバーが自信と誇りを持って活動する事により、広く市民に理解を得られ、しいては会員拡大にも繋がるのではないかでしょうか。近年、法令違反による信頼の失墜など、社会的に大きな影響を与えた事例が繰り返されています。まちづくりを行う団体としてメンバーひとり1人のコンプライアンスの重要性は言うまでもありませんが、法令を遵守していれば何をやってもいいではありません。ひとつくりを行う団体として、コンプライアンス以上にモラルの向上を意識しましょう。

研修においては、人間力開発（HD）を中心に、指導力開発（LD）、経営力開発（MD）に取り組んできました。今後においては、もう一度社会開発（CD）を取り入れるべきではないでしょうか。まちづくりを行う団体として、コミュニケーション力やコーチング力などを踏まえた研修に力を入れていきましょう。また、研修の場は例会だけではありません。委員会においても勉強が出来るような取り組みを考えていくべきです。JC、委員会、個人など様々な視点から多様な事柄について学び、メンバーで共有していくような場を創りましょう。会員個々のスキルアップは、社団法人守山青年会議所全体のスキルアップに繋がり、より良い青年会議所活動に繋がるはずです。

現在、企業経営や自己開発などの研修は、他団体や協会や組合などでも頻繁に開催されています。望めば様々な研修が受けられるようにアンテナを張り巡らせ、その情報をメンバーで共有しましょう。JCだからこそしなければいけないもの、出来るものをしっかり見極め、アクティブに活動できる会員を目指し、会員個々の意識と知識の格差をなるべく無くし、より高いレベルでの研修を行いましょう。

～拡大はJC運動の根幹～

【会員拡大】

我々の運動が明るい豊かな社会の創造であるならば、それに取り組む私たちは自律した市民であらねばなりません。だからこそ会員拡大は理念の実現に向けた一番の近道なのです。

あなたは本当に胸を張ってJC運動をしていますか。現在、全国的規模で会員数は確実に減少しています。それは我々にとっても他人事ではありません。会員数の減少は、不景気やJC運動の認知不足ではなく、活動をしている我々の普段の姿勢にあるのではないかという観察結果です。今こそ目標と情熱、そして己の活動に自信と誇りを持って会員拡大を行わなければならないのです。そして、会員拡大ができない組織は衰退するという危機感のもと、全員が当事者意識を持つことが必要なのです。



- 強い自信と信念を持った会員拡大
- 従来の会員拡大手法の充実と新たな手法の模索
- 未来を見据え、徹底した新入会員教育

会員拡大においては、会員拡大計画を策定し、単年度で終わらない継続した運動を展開が必要です。組織が強化され、活気溢れる社団法人守山青年会議所の未来に向かって、ビジョンをメンバーと共有し、会員拡大に関する基本的な意識を根付かせます。メンバーからの紹介という従来の手法を充実させることはもちろん、さらに会員拡大運動を加速させるための新たな手法に関して取り組みましょう。現状の新入会員候補者データをLOMで共有できるようにデータベース化が必要となってくるでしょう。メールアドレスなどを含む入会候補者に関する詳細な基本情報と訪問履歴などの行動情報をリアルタイムに更新・共有し、継続的な勧誘が出来るような仕組みが必要です。

また従来の特別会員とのネットワークをより強固にすると共に、新たな拡大先として、市内企業とのネットワークを確立し積極的に勧誘を行いましょう。さらには、卒業生には1人1拡大枠をつくるなどLOM内の新たな取り組みも必要となってくるでしょう。全メンバーが、会員拡大活動が通年・継続・全体事業であるという意識を持ち、会員が増えることにより、組織が強化され、しいては活気溢れる守山の創造に繋がることを常に訴えかけ、意識の共有と具体的な手法までを組み込んだ展開を行い、メンバー全員が会員拡大のエキスパートになることを目指しましょう。

また近年は、入会から卒業までの期間が短いメンバーが非常に多く、新入会員の研修がますます重要になってきます。ただ、入会したばかりの新入会員にとっては、何もかもが初めての経験で何をしていいかわからないのが現状です。そんな様々な想いの新入会員にまず活動内容や理念等、JCの基礎を学んでいただく事は非常に重要です。「JCとはどういうものなのか」、ただ漠然と考えていたJCというものを考え方理解し、これからJC活動をしていくための基盤が必要でしょう。それらをしっかりと理解していくことが、これからJC活動へ積極的に参加していくことになり、メンバーひとり1人がお互いを尊重し合い、責任感や自己の資質向上へと繋がると考えます。新入会員研修を共にやり遂げた達成感や様々な経験と出会いが、JAYCEEとしての自覚と誇りを持つ事になり、それがこれからのJC活動の活力（ちから）となり、次代のJCを創る礎となります。実践的な研修を行い、JC活動を広く理解して、自己のスキルアップに繋がるような研修が必要です。

～オモイをつなげるために～

【社会開発】

我々の社会開発事業は、「家庭」「学校」「地域」が協働して子供を育てる地域共育と「市民」「企業」「行政」が協働してまちを創る地域主権を二つの柱とし35周年を境に、「ひとつくりはまちづくり・まちづくりはひとづくり」の観点からこの2つを融合させた「地域共創」という概念のもと進められてきました。

近年の、「守山わんぱく隊」事業では、子供達に原体験や生活体験を通じて「生きる力」と「ゆたかな心」を育み、子供を取り巻く大人たちには「子供を育て、育むまちは自分たちで創る」という自立意識を育みました。継続した事業展開の中で、若者やおやじの会という地域の方々と連携を強化していく、ある一定の成果を収めることができました。

今後は、わんぱく隊に変わる新たなモデルを確立して取り組んで必要がります。



- 連携の推進と強化
- 新たなモデルとなる地域素材の発掘
- 継続性のあるJC主催事業の実施

我々が長年、社会開発事業として取り組んできた「わんぱく隊」は、地域共創システムの1つのモデルケースとして一定の成果を出すことができました。今後は我々が取り組んできた事業が途切れることなく、スムーズに継続していくようなサポートを行い、共に取り組んできた各種団体などとも連携を推進、強化して青年会議所として引き続き青少年の育成とそれを支える環境づくりを中心に取り組んでいきましょう。

また、我々の新たな活動のフィールドとなる地域の素材を発掘して、「わんぱく隊」に変わる新たなキーワードを明確に示し、これまでの事業で構築してきたつながりを基に、新たなまちづくりやひとづくりの起点となる仕組みや拠点を創造できるよう、各種団体へと働きかけ相乗効果が生まれる適材適所での連携や時限性を持った事業を展開していきましょう。

近年の社会開発事業では、パートナーシップによるまちづくり・ひとづくりの観点から我々が主催となる事業が行われてきました。かつては、協働という言葉自体が真新しいものであり、その概念さえもまだ定着していませんでしたが、近年では広くその連携が広がる中で、様々な想いを持った各種団体や専門的な活動を行うNPOが多く誕生してきました。だからこそ、我々が主体となった事業や取り組みが必要なのだと考えます。

「まちづくり」のパイオニアとしての自覚と責任を持って、あらゆる団体と連携して輪と輪をつなげ、多きな環を創り、このもりやまに住まう人々と共に「守山がすき」という和で紡（つむ）いでいきましょう。

社団法人守山青年会議所における社会開発活動を今一度見つめ直し、年間を通じた継続的な事業を展開するべくです。多くの市民の方に我々の活動やメッセージを少しでも、ダイレクトに発信して、青年会議所活動に対する認識や理解を深めることが、メンバーの自信や誇りにもつながり、真に提言できる団体への第一歩となるのです。

今こそ「JCがいる時代」なのです。我々の言葉で、我々の手で、このまちのあらゆるヒトやモノをつなげ（Link）、オモイをカタチにしていくのです。我々が創る（Creation）のは「次代」のまちなのです。

MORIYAMA
Junior Chamber Incorporated